

東京の私学で教えた同志社人

手塚 竜磨



—

明治初期の東京は私学・私塾が全盛をきわめていた。教科は英学を主として諸科兼学というのが圧倒的だった。そこで教えた日本人教師も英学を修めた人たちが出身校別にみると官学が首位をしめ、私学では慶応義塾が多く、鳴門義民の英学所、箕作秋坪の三又学舎など東京の英学塾の名門がそれにつづく。

地方には、まだ私学にみるべきほどのものがなく、静岡、大阪、沼津、福井など官学系のものに占められていた。同志社英学校で学んだ人たちが東京の私学に進出してきたのは明治十年前後からで、第一回の卒業生を出すよりもはやかった。その最初の拠点となった

のは学農社と東京英学校（青山学院）である。

初期の同志社で圧倒的多数を占めていたのは熊本洋学校からの転進者で、この人たちが第一回卒業生としての榮譽をにらんでいるけれど、東京進出の先駆者は、熊本グループの来校以前に京都をはなれた人たちである。卒業証書というパスポートはもっていなかったけれど、同志社教育のエッセンスを身につけた人たちであった。

二

最初の拠点となった学農社は同志社と同じ明治八年の創設で、その翌年開校された。学農社に前後して設立された開拓使仮学校（札幌農学校）、駒場農学校、丹波農牧学校など

の官学はみな英米系農学の流れをくむものであったが、ただひとつの私学、学農社は津田仙が滞欧中実地指導をうけたオランダの園芸家ダニエル・ホイブレンクの影響をうけていたけれど、実質はやはり英米系農学であった。この学農社は、慶応義塾、中村正直の同人社、尺振八の共立学舎と共に東京府下における四大私学校とよばれた。早くから同志社が教師をおくつたのは津田仙と新潟裏の関係からで、津田は学農社創設後新潟あてに書簡をよせ教師のあっせんを依頼している。津田の長男元親、次男次郎があいついで同志社に学び、共に卒業しているのも両者親交のあらわれとみてよい。

熊本バンド来校まえに中退して上京した学



元良 勇次郎

生には中島力造、元良勇次郎、上野栄三郎などがいた。中島と元良はすぐ学農社の教師となったが、上野は外国貿易に従事するかたわら学農社でも教えた。中島はのちエルル大学に留学し、帰国後東京帝国大学講師・教授となり、人格主義、理想主義の倫理学の基礎づけをした。

上野は同志社時代英書によって数学を修めたが、外国貿易に従事していただけに簿記に精通していた。学農社は農学だけでなく、洋算も教科のなかにとりいれてあったが上野がもっともところをえたのは分校として創立された簿記夜学校においてであろう。この分校はウィリアム・C・ホイットニーが契約期限内に商法講習所(森有礼の私塾として発足のち東京府立、一橋大学の源流)をやめたので

津田がとくに開設したものである。上野は英語と数学を教えたが、ホイットニーの知遇をえて洋式簿記にみがきをかけ、『簿記法初歩』(明治十二)や『小学簿記法教授本』(明治十三)などをあらし、ホイットニーの高弟のひとつとして、わが国の簿記導入史上その業績が高く評価されている。津田の長女琴子(英学者津田梅子の姉)と結婚し、実業界で活躍した。

明治十二年の第一回卒業組では熊本バンドのひとり、岡田松生がいる。ホイットニーの息で赤坂病院を経営していたウイリス・N・ホイットニーの家庭集會では、いつも外人教師の通訳をつとめた。

学農社は英語によって農業教育をほこした。ミッシェンの援助はうけなかったがヴァーベックやソーパーが宗教講話をおこない学生的人格形式につとめた。のち明治女学校長となった巖本善治は卒業生のひとりである。

三

はじめ耕教学舎という校名で発足し、のち東京英学校とあらため、さらに東京英和学校となった青山学院には三つの源流があるが、

同志社人が教えたのは、耕教学舎の系列である。すべて米国メソヂスト監督教会が創設したものであることはいうまでもない。

東京英学校(校長神谷齊・学科英学・漢学)の開業上申書が明治十四年三月提出されたとき、英語学教師一名(米人)、学術及数学教員二名、漢学教員一名の履歴書が添付された。数学教員杉田勇次郎、学術教員和田正幾は同志社人である。杉田は元良の旧姓である。海岸女学校(青山の女子部)の初期卒業生元良よねと結婚して夫人の姓に改めた。元良は創立のと同じ同志社へ入学したが中退して上京し、中島と共に学農社で教え、のち東京英学校に転じた。そのまゝに東京大学三学部に進んで

いる。米国留学(ボストン、ジョンズ・ホプキンスの両大学)後、東京英和学校に復帰すると共に東京帝国大学講師・教授となり心理学者として重きをなした。私学出の中島、元良の帝国大学への進出は当時としてはめづらかった。

和田正幾は東京大学三学部から山崎為徳、横井時雄と共に同志社へ転じたが卒業しないで上京し、東京英学校で教えた。一時仙台の東華学校で教えたこともあるが、青山学院へ

もどり青山英学の至宝とされた。このほか長田時行がいる。長田は上州安中時代和田と寝食を共にしたことがあるが、和田のまねきで上京し、のち牧界に入るまで教えた。幸田露伴の語学力の土台は、一年あまり在学した東京英学校時代にこの人たちによってつちかわれたものといわれる(柳田泉『幸田露伴』)。

四

明治初期の教育界における慶応義塾卒業生の活躍はひときわめざましく、母校はもとより山梨、奈良の二県をのぞき全国くまなく福沢直伝の英学をひろめたが、その本拠である三田へも同志社英学は進出した。

熊本バンドのひとり、家永(辻)豊吉は同志社に三年在学してから渡米し、オベリン、ジョンズ・ホプキンス両大学に留学、帰国して慶応で歴史を教えたが、そのまゝに東京専門学校(早稲田大学)にも出講した。

やはり熊本バンドのひとり、蔵原惟郭(よしかず)は同志社を中退、渡米・渡英してニューヨーク、エジンバラの両大学に学んだ。郷里の熊本英学校と熊本女学校の校長をやり岐阜県では四カ所の公立中学校長を兼務したという変り種



中島 力造

である。慶応では哲学と倫理学を教えた。明治末から大正初めにかけて代議士となり「蔵原の赤チョッキ」で話題をまいた。どんな思想に対してもリベラルな立場から理解を示し、警察に留置中の息(惟人氏)に代つてその著書に後書きをよせたことがある。蔵原も家永同様早稲田でも教えた。

早稲田には東京専門学校時代から同志社出身の教師が多く、学者としての業績がもっとも高く評価されたのも早稲田である。熊本バンドのひとり、浮田和民は史学、政治学および政治学史において先駆的業績を残し、言論人としては『太陽』その他に健筆をふるった。教師として私学一筋にいたことでは安部磯雄と双壁であった。ふたりとも母校で教えたのちに東京に出て、東大出身者の多い早

稲田に同志社の学統を注入した。ふたりは、早稲田大学で名誉教授の称号を受けた。

安部と同期の岸本能武太はハーヴァード大学で宗教哲学、比較宗教学を専攻したが英語教師としてもすぐれていた。大西祝(いさむね)は同志社卒業後東大に学び、早大では倫理学、心理学、美学を教えたが若くして病没した。卒業式に『十二の石塚』を朗読した湯浅吉郎(半月)は渡米してオベリン、エールの両大学に学んだが、母校を辞してから上京し、早大の図書館顧問となった。

五

私学で女子教育に尽した人たちをあげねばならない。木村熊二が米国学からかえって明治十八年に創立した明治女学校はミッシェン資金によらぬキリスト教主義の学校で、英語におもきをおき専門コースもあった。島崎藤村や北村透谷などが教えたので明治文学史上で重視されている。同志社出身者では詩人の磯貝由太郎(雲峰)、歌人で讚美歌作者(現行讚美歌一八九・四三四)の湯谷礎一郎(紫苑山人)、少しおくられて青柳猛(有美)が教えた。これらの人たちは『女学雑誌』によって

詩歌、評論に健筆をふるい日本女性の啓発につとめ、三宅花圃、大塚椿緒、相馬黒光、羽仁もと子、野上八重女史などを世に送った。

沢山保羅が大阪にミッシェン資金によらぬ女子教育機関として梅花女学校（梅花女子大学）を設立したとき、片腕となって協力した成瀬仁蔵は明治三十四年目白に日本女子大学校（日本女子大学）を創設した。沢山は大阪で組合教会所属の梅本・浪花のふたつの自給教会を牧しており、成瀬も新島島の母校アンドヴァー神学校に留学したなどの理由もあって、創設時には同志社出身者で女子教育の経験者が多数協力した。麻生正蔵は成瀬の没後二代目校長となったが、同期の松浦正泰や村田勤と共に同志社女学校から転じている。浮田和民や村井知至（東京外語教授も早くから出講していた。麻生が校長になって二年目にあたる大正九年末当時の教授陣をみると、英文学に岸本能武太、浦口文治、西洋史に浮田和民など同志社人が顔をそろえている。

このほか、立教女学校で教えのち校長となつた小林彦五郎、女子聖学院にむかえられた平井庸吉など、女子教育家としての業績はそれぞれ各学校で高く評価されている。

六

初期の同志社で英学をまなび、のち東京の私学で教えた人々には、英学修得のコースにちがいがあつた。熊本バンド出身者にはジーンズの影響が語学の上にも風格の上にもつよくあらわれ、同志社仕込みに対し批判的であつたが、その反面、熊本英語はなっていないと馬鹿にするものもあつた。浮田和民の熊本流発音についても早稲田の学生間ではいろいろなエピソードが伝えられていた（『浮田和民先生追懐録』所収の教え子たちの憶い出参照）が、英学は発音の巧拙だけが生命ではない。横浜で米婦人から正則英語を修めたことをほこりとしていた村井知至は、熊本でも横浜でもない安部磯雄を純粹の同志社英語を学んだ人としながら、横浜仕込みと区別した『英語研究苦心談』。しかし安部磯雄によれば、在学五年のうち英語を語学として学んだのは最初の一年で、あとは英文のテクストであらゆる学科を修め、経済学だけは英語の口授だつた（『往年の学風』所収「同志社の生活」）。経済学の口授はラーネッドであつたことはいうまでもないが、深井英五が、当時の

日本における最高に近いものといっているのはそれを指すのであろう（『回顧七十年』）。

同志社英学が東京の私学に最初寄与したものは英語・英文学ではなく、英語を通じて数学・物理・化学、倫理学・哲学、さらに政治学・経済学・歴史学・比較宗教学などに先駆的な学統を移入したことにあろう。また、英学の素養ある雲峰や紫苑が明治女学校で主として国文学を担当したことは、比較文学史研究の上でもっと注目されてよい。

初期同志社人の教養には熊本、横浜のほか開成学校の英米人や新島、デヴィス、ラーネッドなどニューイングランドから直輸入されたものがいりまじっていた。それらを融合したものが東京の私学に導入されて新風をそそぎかれた。同志社学風の輸血が東京の私学の飛躍・発展に寄与できたのは同志社自体がそのような経過をたどつてきた実績による。

（大10大英卒・都政史料館勤務）

五月十八・十九両日同志社大学で開かれた日本英学史研究会第四回大会で報告した「同志社英学校と東京の私学」に新資料をくわえ、あらたに執筆したものである。

小杯余瀝

石原理雄

The older, the better:—およそ芸術の世界では、時代をさかのほればさかのほるほど美しい。言葉を変えて言うならば、「美」というものは時代が古ければ古いほどそのセンスは若々しい。そして、どんな芸術でも、そのものの起った初期のものが最も美しいと私は感じていきます（これを芸術の初発性といいます）。

木版画の世界でも、法隆寺の百万塔に納められている日本最古の摺経の、ナイーブで一生懸命さを感じさせる文字（七五九）や山城浄瑠璃寺九品仏の中尊の胎内より発見せられたいわゆる胎内仏（一〇五〇）の美しさ——可愛い天使のコーラスが聞こえて来るような

美しさに限り無い愛情と魂の郷愁を感じていきます。

平安朝には、藤原道長の頃、摺仏供養の思想が始まり、人々は現世の救苦をねがい来世の幸いを祈りつつ摺るこの摺仏が、千年の後に版画芸術またはその母体となるなどは露知らず、ただ敬虔に信心深く御仏の姿を彫り或は摺りました。

これら平安・鎌倉・室町期のいろいろの摺仏は、そのどの一つを見ても、そこにいじらしい世界——悲しみに耐えた人、苦しさを救われた人の「永遠のやすらい」を感じ、いかにも円かな、いかにも愉しげな彼らの歌声に聞き入ることは私の「幸い」の一つです。こ



当麻寺十一面観音像（木版画）

れは決して技術の粋のみによるのではなく、純心純情な祈りの息吹きの魅力なのだと思います。

ここで、ふと岡部伊都子先生のエッセイの一行を思い出しました。

「しみじみと思いを托する事の出来るおとなの曲は、子供の手ほどきにつかわれた小曲であった。」

この後、平家納経や久能寺経のように本紙の地文様に版画による文様が摺られるようになり、ここに文字とデザインのささやかな二重奏が奏でられるようになりました。

鎌倉期には信仰のためという純粋な意欲に技術の進歩がプラスして、仏像や宗祖（御影



浄瑠璃寺胎内仏（摺仏）

という)のかなり大きな一枚摺りが出来るようになり、これらの中で一番大きいものは当麻寺の十一面観音像で、タテ五尺八寸(一八〇センチ)・ヨコ二尺二寸(八五センチ)もあり、こんなに大きな版木は現在では需めることさえ至難、しかもその大きな版木狭しと彫られている御顔や御姿は豊麗を極わめ、その豊麗な美しい流れの線を追った刀の刻みに鋭さ殺さも見られて、「高貴の艶」とはかかると美しさではないかと仰ぎ見ます。

次いで、版画は横にも長く展開しはじめ、融通念仏縁起(南北朝一三九〇)を始めとした数々の絵巻物語として文学書の香りを匂わせるようになり(室町時代)やがて生まれて来る天才本阿弥光悦による美術的意匠や装幀の前置曲となります。

*

桃山・徳川初期に入りますと、仏教版画の民衆浸透とともに一方では挿絵入りの光悦の伊勢物語・徒然草(一五八三)少し降って方丈記、そして御伽草子、西鶴の浮世絵草子(一六八八)等が次々と刊行せられて、版画は「用」と「美」を兼ねつつ「民衆の法悦」より「民衆の文芸」となり、色彩においても、初めの墨または朱の単色摺りより年を追いつつ雲母摺り金銀摺りも生まれ、しかも草木・花果・岩石から採った美しい黄・緑・青・藤色

などを木版画の上に彩筆で粧おうようになりました。あたかもこの事は、人々の精神生活を一色から七色にも八色にも彩って行ったことと思います。

かくして元禄年間(十六世紀)彼の有名な師宣の出現とともに版画は草子類の挿絵より前進飛躍して遂に「独立した鑑賞版画」としてデヴィューすることとなりました。師宣は写実力にすぐれ、今という芸術家魂にあふれ、彼の風俗版画は格調も高く梅原龍三郎先生もその魅力に惹かれて、かつその一時期御自身で木版画裸婦を数点制作されたくらいです。新芸術創造の熱意はとぼしる菱川師宣の風俗版画は、やがて「浮世絵」と称ばれて、春信・清長・歌麿・北斎・写楽それに広重という星雲きらめく時代を現出しました。

しかし、彼らの作品は庶民芸術として余りにも人々の身近に在りすぎたため、人々はその美しさや芸術性を見落してをり、見逃がされたその「紙くす」浮世絵版画の美しさは、後年になって遠く海を渡って欧米で発見せられ、マネー、モネ、ゴッホ、ゴーギャン、ボナール、十九世紀印象派の巨匠連を驚嘆かつ開眼させて爾後の彼らの画風に大きな影響をお

たえました。しかも同時に、ルネサンス以来の彼らの技法に代わる版面芸術の世界をも発見せしめたのです。そしてこの事は、一転二転してやがて志賀直哉・武者小路実篤先生たち「白樺」を主体とする文学者による印象派——浮世絵版面に影響感化された印象派画家の美しい作品の紹介となり、あわせてゴーギャン、ロートレック、ヴァロットン等の版面も紹介されて、ここに日本における創作版面（自画・自刻・自摺）の誕生を見るに至りました。

一方、上述の日本伝来の方法——版面を描く人・それを板に彫る人・それをまた紙に摺る人の三位一体（三者協力）で一つの版面を創り上げるといふ方法——は、広重以後は知性感性の乏しい職人仕事となり、ただいたずらに版教をのみ摺り重ね、かつケバケバしい色を摺り、ほぼ百年の間マンネリズムに陥りました。特に大正から昭和にかけては、第一義である「版面独自の美しさは何か」からも離れて先人初版の複製を摺ったり、またはそのころの有名画家栖鳳、関雪、大観らの毛筆画を複製版面にしたり、果ては染織の下絵本・図案本を摺ったりしておよそ芸術とは程遠い代

用品複製品にまで落ちぶれてしまいました。

何故なのか？　ここで私は柳宗悦先生の言葉をかりて見たいと思います。「初期のもの程版面自体から美しさが湧いている。

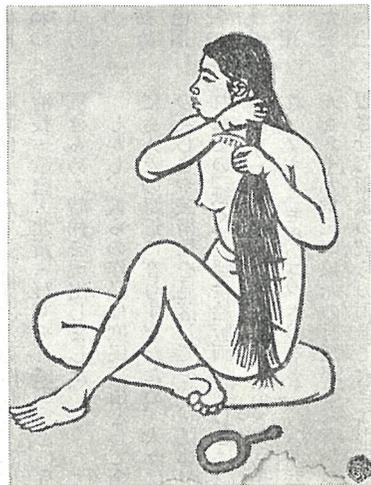
後期になると技巧が複雑で上手になる為絵画的になってくる。版だと云ふ事がわからなくなる迄に上手になったのである。

筆に依る絵画と版に依る版面を混同してはならない。

版面は版面たる可きであって絵画の奴隷であってはいけない。絵画で現はし得ないものこそ版面の領域である」と。

*

現在、日本を含めて何百人何千人の木版画家・リトグラフ（石版画）作家・エッチング（銅版画）作家がフレッシュな美しい版面を創りたいと念願しつつ制作活動に明け暮れています。そしてその中の少数の何人かは、今の瞬間にも永遠の美を板に彫り刻みつつあり、紙に摺り込みつつあるかも知れませ



髪を梳く女（梅原龍三郎作）

ん。昔からそうであったように、そして未来にも版面は決して民衆から離れません。美しいけれど、それが幾つもできる故にこの理由で、版面の美しさを見落さないで欲しいと思います。美しいものはそれが幾つあっても美しいし、安値であってそれは尊いのです。

小村余瀝——私はこの言葉が好きなのですが、私の小村余りに小さく、余瀝また美酒でなかったことを深く恥じます。

私、ここで書き落しましたことでぜひ書きたしい事が二つ。

その一つは、正倉院御物や法隆寺伝来の裂地の中で絹や麻に木版による画文様が摺り込

まれ、版画は千二、三百年の昔、奈良朝既に染色工芸としてその美しい花を咲かせていたということとす。そしてこれは蜜絵と称んでいます。

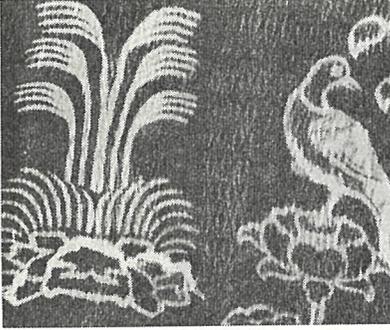
今一つは、先に述べましたように版画は初め人々の信仰的な必要によって生まれ、中期には「用」と「美」を兼ねつつ、今日では木版画独自の「美しさ」の追求創作に挑んでいます。

しかし、ここに木版画の分流として、しかも木版画よりより安く、より早く、より多くという民画「大津絵」が徳川初期に生まれています。一見あらっぽい手摺りと手彩色（筆

致）は、これ以上の自由さ、これ以上の奔放さ、これ以上のデフォルメは不可能と思われる「純化の美」世界です。

私がラングドン・ウォーナー博士に御生前御目にかかった時、「出来れば私は古い大津絵を蒐めたいのだが……」と語られた一事でもその美しさをうかがえると思います。

しかし、この大津絵も芸術の初発生の例に洩れず、初期（寛永年間）の仏画、中期（元禄年間）の世俗画（諷刺的なものや心学の影響による道訓的なもの）を契機として文化文政以後は「美」からかけ離れた単なる戯画とし



上・木版応 絹 正倉院
下・木版染め（蜜絵）麻 鎌倉時代

昭和44年度 入学試験要項

同志社大学

※申込先——京都市上京区今出川通鳥丸東入
同志社大学試験事務室

同志社女子大学

※申込先——京都市上京区今出川通寺町西入
同志社女子大学入学試験事務室

※一部 150 円（送料とも）——宛名明記の紙片
（10cm×5cm）を同封のうえ請求のこと。

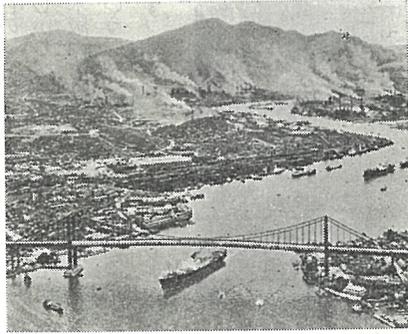
て下降の一端をたどり、その二百年の歴史を閉じてしまいました。鉄斎やマチスの美の世界にも似た古典大津絵のヴァリエーションを現在の作家に期待するのは私一人の熱い夢ではないと思います。

大津絵の筆のはじめは何仏 芭蕉

芭蕉が大津や逢坂らを越えて、追分街道を旅した頃、一文か二文の安値でしかも美しくつた大津絵を懐かしみ筆をおきます。

（昭14大経卒・美雲木版画社社長）

福岡県下の同志社人



吉田法晴

つが今はなき島本徳三郎先生（日炭の常務取締役、後の日産会常務理事）同じく当時お元気だった西南女学院の創設協力者故原松太先生などの大先輩を中心に、北九州の校友・同窓が集まった。その時の写真が今も残っている。総長を迎え、大先輩の胆入りで集まったのだからよく集まった方だと思いが、それでも十数名に過ぎなかった。

いま福岡市で田島守人支部長のもとに集まる校友・同窓も、北九州市で高木勲支部長の呼びかけで集まる校友・同窓もいつも数十名にのぼる。恐らく県下全部の校友・同窓は千名をはるかに越すだろう。

三年ほど前から四男が同志社商学部にて在学している関係で、商学部後援会に出席させて貰っている。後援会の総会のと、高商時代から今の商学部に移られた教授が沢山こられ

る関係もあり、例年樹徳会福岡支部の校友が集まるが、それに出席される樹徳会々員だけでも数十名にのぼる。福岡や北九州で公演される同志社オーケストラやグリー・クラブなども、いつも満員だし、好評である。

昭和十一年ごろから、昭和四十三年までの三十年余の間に、新島先生立学の精神——同志社精神と同志社マンの「良心」が天下に知れわたり、京都や関西の同志社から、天下の同志社、少なくとも私学では西日本第一の同志社となった。

*

福岡県下の校友・同窓は多く、県下各方面各階層で重要な地位、指導的役割を果しつつある。

福岡県の人口四百万、県下に十五の市があるが、私の北九州市長の四年の任期が終わる一年前の昭和四十一年、筑後市の市長に昭和十二年法学部卒の田中千男氏が当選され、十五人の県下市長の中で二人が同志社マンだった。その前から福岡市の南、筑紫郡春日町の町長は昭和八年高商卒の秋枝憲男氏だったから、県下の首長に三人の同志社マンが居たわけである。市町村の地方議員・地方公務員

私が昭和十一年同志社法学部を卒業して今の北九州市の西の端、折尾のすぐ先、日本炭鉱株式会社高松炭鉱に入社した年はまだ暑さ残る九月頃だったと思う。小倉の日明教会（当時の牧師さんは同志社人だった）に当時の総長湯浅八郎先生を迎え、まだご健在であ

には数知れずいるだろうが、ごく最近まで首長に準ずる北九州市の若松区長を馬采忠男氏（昭8高商卒）が勤めていた。

学者では、校友会福岡支部長の田島守人氏（昭4大神卒）と松枝夫人（昭5大英卒）が同志社人で、揃って同じ私立福岡大学の英語の教授である。北九州のミッションスクール西南女子短大には英語担当保育科長の古沢基生教授（昭13専英師卒）がおられる。九州大学経済学部には、高木暢哉・高木幸二郎の両教授がおられる。暢哉氏は病気で六高を中退ののち、幸二郎氏は旧制一高を学生運動で退学し、いずれも同志社大学予科を卒業ののち九大に学び、ともに経済学部部長を勤められた。市立北九州大学の学長、日本学士院会員今中次麿先生、九大法学部政治学担当の具島兼三郎教授は、いずれも同志社大学の教授で令名をはせた同志社マンである。

学者なのか、経済人なのかあまいというより、その双方にまたがるのが小倉駅前レストランONNOの支配人今西善次郎氏。予科卒業後、アメリカに音楽を学び、西南学院に教鞭をとっておられた。今も下関市の短大の教授をしておられるから学者・先生でもある

が、昼間は真白な割烹着を着てレストランの采配を振って居られるから、本職はレストランの支配人なのだろう。その他、西部合唱連盟というアマチュア合唱団の指導というか主宰をしておられるバリトンの声楽家、音楽家でもあるわけだ。

もう一人かわった同志社マンはONNOと向い建っている小倉ステーションビルの中にある都ホテル直営小倉駅食堂の経営者で、小説を書く福村富吉氏（旧名・源一、昭5高商）である。この人も本職は喫茶店の経営者だが大陸での戦争経験が基礎になっているのか、ユーモアとペーソスを混えた戦争小説を書かれる。文彩豊かな案内状を月々出されるから、感心して見せて貰っているが、特殊な才能の持主である。

同志社で一番古い歴史のある神学部を卒業、教会その他宗教界に活躍される方は、前に書いた日明教会があったが、今は違うようだ。神学部を出られ牧師の資格をもちながら教授をしておられる田島夫妻のことは前に書いた。その他にもいらっしやると思うが私の不信仰のゆえでよくわからない。

*

自由業では、福岡で弁護士をしておられる藤井亮氏と北九州で公認会計士・税理士をやっておられる高木勲氏。いずれも長老——と——という叱られるかも知れないが——大先輩である。校友会のそれぞれの支部で敬意を表して藤井先輩に顧問、高木先輩に支部長をおねがいしている。藤井先輩は大正十四年経済学科を出て司法試験に合格、しかも裁判官になられたのだから試験の成績がいかによかったかが証明される。そして最後に高等裁判所の長官をやり、やめられて現在は弁護士をしておられる。高木先輩は昭和二年高商を出て経理士・税理士の資格をとり、長い経理士の経験の後公認会計士になられたわけだが、高商を出られても全部が全部経理士になられる訳でもないし、公認会計士になられた人は更に少ない。高木先輩の頭脳明晰の上に重ねられた努力がしのばれる。こうした長い努力と功績が認められ、藤井先輩は昨年勲二等瑞宝章を受けられ、高木先輩も昨年藍綬褒章を受けられた。福岡県下の同志社校友の大先輩で自由業に従事され、しかも、こうした高い社会的評価を受けられた点で、お二人はわれわれが誇り得る東西の双璧である。

明治八年（というかわれわれ現在の校友がまだ誰も生れてなかった時）最初にできたのが同志社英学校、それから神学科、普通学校から専門学校ができたのが明治三十七年。その最初は英文・経済だったと聞いている。こうして経済学部や高商は歴史も古く卒業生が多いゆえもあろうが、福岡県下の経済界で活躍しておられる校友が一番多い。紙幅の関係でその一部だけしか書くことができないが大事な人を落しているかも知れぬ、お許し下さい。

＊

地方大手ともいふべき福岡のデパート岩田屋は、校友中牟田一門の経営だが、綱場町時代の紙弥とか紙与と並び称せられた古い呉服商時代からの伝統で客筋、それに福岡県内に続くこの岩田屋附近の天神町が西鉄の市内線と大牟田線の交わるところでしかも戦災を受けない、戦後福岡市の中心がここに移ったこととあいまって、今や岩田屋はデパートとして揺ぎなき地位を確保した。最近はずーパーの進出がめざましいのでこれに刺激されてか、私の郷土宗像の「森林都市」にショッピング・センターを作られた。鶏卵と教員以外産出す

るものなかった純農村に、福岡から学芸大が移り、東海大学分校ができ、北九州・福岡のベッドタウン化して十年後には人口三十万の都市になろうという。昭和十七年経済学部卒の中牟田円次郎氏は岩田屋産業株式会社社長、その弟の中牟田栄蔵氏は続く昭和十八年法学部卒で、その常務。そして校友会福岡支部の世話はこの岩田屋で長くやっていただいた。中牟田一族を助けて岩田屋を今日に至らしめるとともに、この数年中牟田兄弟を助け校友会の実務をやっていただいた福川靖之助氏は昭和十年高商卒、岩田屋社長秘書や常務を勤められた後、ごく最近、さきほどのショッピング・センター社長になられた。

福岡の天神町岩田屋のすぐ向い側に本社を置く九州最大の私鉄、西日本鉄道株式会社の北九州営業局長——北九州の大将——でこの一月常務取締役になられた林田勲平氏は昭和十一年高商卒。大正時代から北九州で電車や電力経営をやっていた九州電気軌道株式会社は戦後の電力再編成で、福岡中心の東邦電力と合併して今日の九州電力と相なった次第だが、林田氏は九軌時代からの古い電車マン。言いたいことも言い実行力もあるが、何より

従業員に絶対的に信頼があり、それが九軌出身の楠根社長のもとで常務に抜擢された最大の理由だろう。校友会福岡支部はこの一月臨時総会を開いて藤井亮先輩の勲二等瑞宝章受賞とともに、この「勲平さん」の常務取締役に昇格を祝ったものである。

＊

北九州小倉の段谷産業は、合板を造る中堅企業だと思っているうちに、最近めざましい躍進をけている。昨年は下関工場を彦島福田に、関東工場を茨城県猿島郡総和町に増設、今までの小倉工場分をあわせると昨年の年生産一〇〇億を突破、今年は一三〇億を目標にしておられるという。昭和十四年、岩倉時代の高商から経済学部に進み、昭和十六年同学部を卒業した段谷直樹氏は、長兄の段谷弘忠氏を助けて段谷産業専務、段谷プロント板工業会社の取締役である。段谷氏が校友会の席上、強く訴えられた木材港の整備は、北九州港管理組合（当時の管理者は筆者）が北九州港の一部若松港の北に関門港の浚渫理立と関連計画し、今年実現の緒についた。

福岡の上田宗八郎氏は林田勲平氏などと同じ昭和十一年の高商卒。筑紫産工の事業を継

いで社長。仕事の方も堅実だが校友会副支部長として校友の世話もよくやっていた。

この数年商学部後援会の九州支部長を引き受けられ、商学部関係の世話をしていただいているが、上田さんの人柄は関係者一同すっかり感服しほれ込んでいるところである。二男が商学部にて在学されるようになって商学部後援会九州支部長を引き受けられたわけだが、その坊ちゃんが卒業されて、現在、名目上私支部長を引継いでからも依然変わらざる世話が続けていただいているし、奉仕と犠牲の典型的同志社人である。

県下最大のガス会社・西部ガス株式会社の取締役総務部長、今村淳氏は昭和十六年商学部卒。英松の石炭商から今はプロパンを扱って中堅経済人もあり、若松の同志社マンの中堅でもあるのが貴船商事の社長・福田利彦氏（昭25高商）である。天下の八幡製鉄所は昔官営であったし、通産省のおえら方だった人たちが社長・副社長などにきら星のごとく並んでいるが、その中で同志社人の気焔をはき、行橋に工場をもつ八幡製鉄系八幡ホルベンの社長をし、最近八幡製鉄を退いて八幡製鉄系不動産会社の社長になった浜竹守氏、こ

の人は昭和九年の高商卒。

*

このほか北九州の同志社校友の大先輩で北九州中小企業団体連合会を作った大正十年経済科卒の秋満清治氏は、岡崎工業社長の叔父さんで岡崎工業の役員もやられたし、現在北中連の顧問である。北九州で校友・同窓の事実上の中心をなし、支部長を助け若い者を育てながら会員の行届いた面倒をみていただいている徳永百合蔵氏は、酒類の卸小売の有力商店真玉商店の専務取締役。福岡の校友会の中心である常任幹事平野晃一郎氏が、自動車やスクーターを販売する平野商店の社長であるのと東西相対応する好一対の中堅経済人である。

お祖父さんの早野竹蔵氏（明25神別）、同志社新聞を創刊したお父さん浩吉氏（昭3大法）と父祖三代にわたる同志社人で、子供の入学も同志社以外には考えられない、というのが井筒屋教育部次長の西晴次氏（昭28大法）である。

同窓の方は特にうとくて福岡の田島支部長夫人、北九州でもお父さんの代りに貿易を手広く営む久永碧^{あき}さんを思い出すが、その他

はよく存じあげない。

最後にますます同志社校友と同窓の世話、校友会同窓会活動の企画から推進、学園との連絡、学園の校友や同窓のみならず一般社会への働きかけから学生の学外活動への協力まで多面的奉仕活動を通じて福岡、北九州の支部活動を活発、豊富にし、同志社の声価を高め、同志社マンここにありと、気を吐かしていただいている支部世話の人々は次の通りである。

福岡支部は支部長が田島守人氏、副支部長が上田宗八郎氏と中牟田栄蔵氏、常任幹事が平野晃一郎氏、会計が森田宗治氏、監事が秋枝憲男氏、顧問藤井亮氏というところ。

北九州の支部長が高木勲氏、常任幹事が徳永百合蔵氏、各区の世話人が門司・竹野篤一氏、小倉が佐藤幹一氏（昭36大経・洋服店）岩田保司氏（昭29大商電気器具）八幡・佐々木健氏（昭16高商喫茶店ウィーン）若松・時永久氏（昭30大商レストランにじ）大牟田支部長・執行種治氏、久留米支部長・吉田保氏、筑豊支部長・渡辺幸広氏がそれぞれ支部長を中心に活躍しておられる。

（昭11大法卒・前北九州市長）

ハッサンとボーリスの国

— その 1 —



村 山 盛 忠

朝夕ほとくの住んでいるヘルワンのペランダからは、ギザのピラミッドや階段式で有名なサッカラのピラミッドなどを遠く見渡すことができる。そのすこし手前にギラギラ光って見えるのはナイル河である。そのナイル河にそって少し南下したところサッカラのピラミッドの近くには、かつて栄華をきわめたテーベの都よりも古いメンピスの遺跡がある。

三日間ぐらゐの旅情を楽しむには或いはエキゾティックな風景であるかも知れない。ぼく自身もはじめてこのヘルワンにやって来て住みはじめた頃、西日で空が赤く焼け、沙漠の水平線のかなたに黒いシルエットになって浮ぶピラミッドを眺める時、いつしか自分がファラオ時代の世界にひきずり込まれて行くのを感じたものである。しかし四年もエジプトで過して来た現在、これらの景色はほとくの生活の一部にとけ込んでしまったようだ。この秋にはいよいよ帰国の予定であるが、やはり深い感慨をもって再びこれらの自然を受けとめていくことになるだろう。

コーランの朗詠

エジプトの国がアラブ民族の世界に属し、

かつイスラム教の支配勢力下にあることは周知の事実である。どんな町や村に行っても、そこには細長く空に向って立っているイスラム寺院のミナレットを見出すことが出来るだろう。特に金曜日ともなれば、これらの寺院から拡声機を使ってコーランの朗詠やらお祈り、そしてシエハ（長老）の説教も流れてくることだろう。近代都市カイロ市内のビルの間でも金曜日の昼食時、ゴザを敷いて祈っているイスラム教徒の姿を見出すのだ。主要駅の構内にも彼らのための「祈り場」がもうけられている。また汽車旅行でもしながら走り行く窓の景色を眺め楽しんでみると、ナツメ椰子やサトウキビ畠のそばに水牛やロバ、羊たちの群がのどかな姿で目につくことだろう。そして時折その中にまじって木影や井戸端のそばでメッカに向かって祈りを捧げている農夫の姿が目に入ってくるのだ。

ほとくの住んでいるヘルワンは革命後（一九五二年）の産業化によっていくつもの新しい工場がその周辺にたてられこの国の唯一の重工業地帯となっているが、これら新しい労働者人口を受け入れるために労働者のためのアパートがぞくぞくと建てられている。そして

その中心にイスラム寺院（モスク）を建てることも忘れない。もちろん工場の中にもモスクは建てられている。ヘルワンの旧市内の人口は約五万であるが、モスクは十三ある。これなどまだ少ない方で、最初にぼくたちが住んだマハラ・エル・クブラという街は中近東一の繊維工場があるところであるが約三百のモスクがあったものだ。お祈りの時間になると、あちらのモスクからこちらのモスクからなり響くコーランの朗詠は、今でも耳の底にこびりついているくらいだ。

これに対して教会の数はカイロやアレクサンドリアの二大都市は別としてほしい一つの町にコプト正統教会、プロテスタント教会カトリック教会がそれぞれ一つの会堂を持って集会をしているようだ。ラジオのスイッチを廻すとコーランは一日中なりひびいている。それに対してキリスト教の時間は毎日曜日午前九時から九時半まで、各教派が分担で礼拝放送を行っているのが現状だ。

二つのコミュニティ

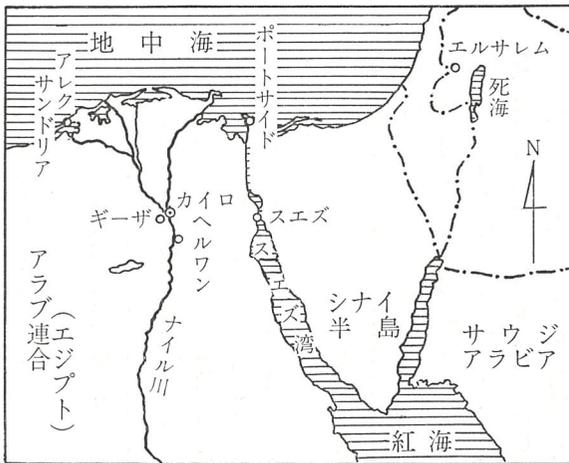
現地のキリスト教会について語る場合、やはりイスラム教を抜きにしては語ることはで

きないのだが、それは今まで両者の対立という形で取りあげられてきたようだ。そしてそれはある点において事実であったであろう。明確な数は解らないが公にはキリスト者（コプト人）の数は人口の十パーセントとなっている。しかし、コプト正統教会の発表によると、キリスト者は五百万人であるというから人口の約十七パーセントに当ることになる。しかしこの場合キリスト者といっても日本で考えるような教会員という概念ではないのだ。むしろ仏教における壇家の概念に近い。信仰は家庭単位で考えられているのだから。

エジプトではイスラム教とキリスト教とは明確に二つのコミュニティに分れている。日本におけるように個人の信仰によってその宗教の信仰を告白するのではない。自分が生まれたところがキリスト教（コプト）の家庭であるならばキリスト教徒として登録され、イスラム教の家庭であるならばイスラム教徒になるわけだ。もちろんどちらかの宗教に改宗するということも起りうるわけであるが、それは例外中の例外で、ぼくは三つの例を

知ってにすぎない。自分が改宗するというとは自分のかつて属していたコミュニティ（家庭・親族・職場）を放棄して新しい世界にとび込むということであるから実に想像以上の闘いがあるのだ。

その人の名前を聞いただけでイスラム教徒かキリスト教徒と判断出来るというものがこの



二つのコミュニティに分離されていることと無関係ではない。もちろんどちらにも通用する名前もある。「モハメッド」とか「ハッサン」「アハammad」という名前は明らかにイスラム教徒の人たちである。それに対して「ボリス」(パウロ)とか「サムイル」(サムエル)、「ポトロス」(ペテロ)などはキリスト者ということになる。両者ともに使われている名前では「イブラヒム」(アブラハム)、「ファウディ」、「アブダッラー」(神の僕の意、大統領もアブダッラー・ナセルである)などがあるが、その人の名前を聞いてほしいイイスラム教徒かキリスト教徒かが判別が出来るのだ。汽車旅行などで同席の者と互に挨拶をかわし、自分の名前を名のり合い互が同じ宗教に属していることが解ると、が然話しもはずむということになる。

不思議に未だ無信仰者という人物に出会ったことがない。それほど宗教的な人間であるということが出来るのかも知れない。一年ほど前のことになるが、タンタという町からカイロに向う汽車の中で隣りに座っている中年の男が話しかけて来た。「お前は中国人か」と尋ねる。これは誰れもがいう挨拶で、どうも

中国人という言葉で東洋人一般を指しているらしい。「いや日本人だ」と答えると「それはそれははじめまして。それでお仕事は?」
ぼくは自分が牧師であると答えると、この男は自分はイスラム教徒であるが互に、神様を信じていることは良いことだと雄弁に語り出すのだ。それからしばらくしてお前は中国をどう思うかと尋ねるので「僕は日本人であるが、日本人全体の感情からいうと中国は隣国で昔から文化的な交流があったので、非常に親しみを覚えている」と答えると、この男はひらき直って「お前はキリスト教の坊主だといったがそれでは本当に神様を信じていない。神を信仰しない共産主義者に親しみを覚えるとはもってのほかだ」と。そこでぼくたちの会話は停止してしまったのだ。別にぼくはこの話しを大袈裟に記しているわけではない。これがあるままの現実なのだ。その形式において実に彼らは宗教的な人間であるのだが、その生活の底から実に強烈な世俗性を感ずるのは一体どうしたことであろうか。

コプト教会

さて話しが横にそれたが、この二つのコム

ユニティが分離されて存在しているということとはこの国の教会の歴史と無関係ではないだろう。伝承によると福音書記者マルコが最初にエジプトに伝道を開始、三世紀初期にはすでに国土はキリスト教化され、当時のキリスト教世界でもアレクサンドリアの教会などは重要な役割を果たしたことは周知のことである。一説によるとファラオ時代の父(オシリス・母(イシス)・子(ホルス)への信仰がキリスト教の三位一体信仰を受け入れれる素地として重要になったという。また靈魂不滅の信仰を伝える場合の媒介となったであろうことは容易に考えられることである。

エジプトのキリスト者を「コプト人」と呼び、またその教会を「コプト教会」と称しているが、「コプト」とはギリシャ語のヘイギプトス(エジプトの意)から来ており、それをアラビア語で発音していく過程で「コプト」という語が生まれて来たわけである。だから「コプト教会」というのは「エジプトの教会」また「コプト人」という場合は「エジプト人」と同語である。

かくして数世紀の間にエジプトはキリスト教国となったが、かの七世紀のアラブの侵入

によって一瞬の中にエジプトはアラブ民族の支配下におかれ、かつイスラム教の君臨するところとなったのだ。このアラブの侵入は「剣」か「コーラン」かで象徴されているが、史実はそんなに簡単には片づけられないようだ。確かに激しい迫害があったことも事実である。例えばコプト人（キリスト教徒）には兵役はなかったがその代りに重税が課せられ税を収めた者にはそのしるしに烙印が押されもしも捕えられてその手に烙印が見出されなかつたら片腕が切り落とされたとのことである（七一〇年頃）。また八五〇年頃にはコプト人には黄色の着物を着用することが命じられたり、ハキム支配時代（九九六一—一〇二一）には五ポンドの木製十字架をさげることがを命じられたりしている。もちろんその間教会堂の破壊や特にデルタ地区の農民がイスラム教に多く改宗していった。それと同時に教会の内部事情として修道士たちの信仰的墮落があったことを銘記しておかねばならぬだろう。エジプトの修道院の歴史は世界で一番古く現在に至るまでその活動が続けられているのだが（コプト正教会の主教に選ばれるのは原則として修道院出身者となっている）、当

ボート部オリンピック出場

大学ボート部（エイト）は去る8月25日、戸田国立競技場で行なわれた全日本レガッタに優勝、あわせて本年秋、メキシコで開かれるオリンピック大会に日本代表として出場することになった。派遣選手は次の通り。

（◎印は主将、*印はコックス）

〈監督〉

四方 久男（41）昭和22年経専、25年経済学部卒業、京都市。

〈選手〉

清水 正俊（20）商学部3年、178cm、73kg、三重・津高出身。

村井 富雄（20）経済学部3年、182cm、75kg、石川・小松高出身。

◎加藤 忠正（24）経済学部4年、178cm、72kg、京都・東山高出身。

宮川 滋（20）商学部2年、183cm、76kg、新潟・明訓高出身。

中田二三男（20）経済学部2年、180cm、72kg、長野・岡谷南高出身。

田中重次郎（21）商学部2年、180cm、76kg、奈良・正強高出身。

福 益 敏（22）経済学部4年、182cm、76kg、鳥取・米子東高出身。

新井 喜範（20）商学部3年、179cm、75kg、石川・金沢泉丘高出身。

*山本 克美（21）工学部4年、164cm、53kg、京都・同志社高出身。

時の修道士たちが聖書の研究よりもむしろギリシャ・ローマの「ロマンズ」などに耽溺し人々の精神的支柱となるには事欠いていたらしい。かくして七世紀のアラブ民族の侵入以来、コプト人（エジプト人）たちは厳しい迫害の歴史を繰り返しながら近代にいたり、この国の「少数者」として現在もお教会を中心にして存在を続けているわけである。両者が二つのコミュニティに分離され迫害の歴史を繰り返して来たことは事実であるが

ポトロス・パシャ広場にて

六月二十六日の朝早くぼくは西アフリカのシレ・レオンからきているウイリアムズ牧師

しかし現在もおそのような観点から両者の関係をとらえようとすると大きな誤りを犯すことになるであろう。

ぼくは先日、コプト正統教会の一九〇〇年祭式典に参加し、そこで深く感じたことをここに記してみたい。

をともなつて、カイロのラムセス通りをタクシーでとばしていた。午前九時からナセル大統領とエチオピアのセラセ皇帝出席のもとで伝道者聖マルコ殉教一九〇〇年祭を記念して建てられた大聖堂の除幕式に参列するためである。会場近くのボトロス・パシヤ広場に近づくたびに人々の波とそれをさばく警官隊とで車はすずなりになつて除行運転、やつとすることで会場近くで車から降りることが出来た。すでに八時半を過ぎていたので、ほくたち二人は馳足で会場に向うと前方入口に白服着用の警備隊がコン棒をもって居並んでいるのだ。ほくたちが近づいて行くとその中の一人が「入場券を見せろ」という。ほくは前もつて教会の事務所に連絡してあったのだが入場券など送つてこなかったのだ、こういうこともあろうかと、日本キリスト教団からメッセージを携えていたのだ。「ほくははるばる日本から今日この日のために日本の全キリスト教会を代表してメッセージをたずさえて来た。これがそのメッセージである。またこちらのウイリアムズ牧師は全アフリカの教会を代表して今日シレ・レオンから飛行機でやって来たのだ」と語り出すと「もういいから入

れ入れ」と通してくれた。会場に当てられたところは新しく建てられた大聖堂の横の広場天幕をはつて四千人ほどの収容力をもつものである。すでに人々はぎっしりとおつており壇上向つて左側は外交官席、その中に日本のカイロ大使夫妻の顔もみえた。会場左側は内外報道関係者そして壇上を取りまいてテレビの映写機や照明、マイクなどがところせましと並べられ、この記念式典のフニキを一段と熱っぽいものとしているようだった。

九時五分前、コプト正教会の主教キロロス六世が入場してくるとみんな一勢に拍手をもつて迎えた。すでに壇上にはシリア・オーソドックス、ロシア・オーソドックス、ローマカトリックまたWCCの代表者たちが居並び主教キロロス六世はこれら壇上の人々と親して挨拶をかわしていた。ほくたち二人はようやく会場半ばあたりに椅子を見つけて座ることができ、これら壇上の赤や黒のガウンで着飾つた代表者たちの有り様を人形劇でも見ているような思いで眺めていたのだつた。

しばらくすると会場前方がザワつきはじめるると人々は一勢に自分の席から立ちはじめその日の二人の賓客、ナセル大統領とエチオピ

ア皇帝の入場を待ちかまえた。二人の姿が壇上に現われると会場から割れるような拍手、時おり「ナセルノ ナセルノ」と叫ぶ声みだれ飛んでいたがそれも拍手の響きで消されてしまった。大統領は黒の背広、皇帝はカッ色の軍服を着用、この会場からの歓迎にこたえていた。

その日の式典は約二時間半も続き、各教会の代表者が祝辞を述べたのだが、ほくがそのさ中で強く感じたことはやはりコプト正教会の伝統の力、底力というものをこのヒフに覚えたことである。迫害、破壊、沈黙の歴史そして今ようやく他宗教との対話を求めてコプト教会が新しい歴史の歩みに積極的に参加していかうとする姿勢をうかがうことが出来たのだつた。アラブ諸国の政治的指導者でもあるナセル大統領がコプト教会の主教キロロス六世と並んでいる姿はその教会の歴史に触れるものにとつてやはり一つの感激ではなかつたろうか。イスラム教とキリスト教との対話が、この新しい国造りを進めている指導者を通してなされていると見るのは僕の単なる推測に過ぎないだろうか。

(昭34大神院卒・牧師)